

CESCHI NEWS LETTER

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター ニュースレター

2021年度京都大学文学研究科公開シンポジウム

「ユーラシアにおける宗教遺産研究の可能性」

12月4日(土)、2021年度京都大学文学研究科公開シンポジウム「ユーラシアにおける宗教遺産研究の可能性—伝播と融合—」を、本センター内のユーラシア宗教遺産部門が中心となり企画・開催しました。コロナの感染状況が落ち着いていたため、報告者は文学研究科第3講義室に集まり(一部報告者はオンライン参加)、それをZoomにて中継する形で実施しました。参加者は合計193名で、Zoomの記録では、国内に加え、オランダ、スリランカ、シンガポール、中国、ドイツ、トルコ、ベトナムからの参加もありました。

今回のシンポジウムはユーラシア宗教遺産部門の成果発信の一環として、インドから中国、そして日本へという仏教伝播の過程を踏まえながら、ユーラシアにおける諸宗教の伝播と融合の実態や、融合のあり方の差異に関して、議論を深めることを目的としました。そのため、7名の報告者・コメンテーターをたて、さまざまな地域や研究対象について事例報告をするとともに、宗教の伝播と融合をめぐる総合的な討論を行いました。

横地優子「初期ヒンドゥー教と南アジアの基層文化」では、インド・アリア語族の宗教文化と南アジアの基層文化、さらにはヘレニズム文化などが融合するなかで、それぞれの伝統を継承しながらも、まったく新しいヒンドゥー教の宗教文化が生まれたとし、その具体例を文献とともに、ヒンドゥー美術の図像で示されました。

仏教思想と「インド的なもの」との関わりを論じた

京都大学文学研究科・文学部
公開シンポジウム

ユーラシアにおける 宗教遺産研究の可能性

— 伝播と融合 —

Speaker

横地 優子
Yuko Yokochi 「初期ヒンドゥー教における南アジアの基層文化」
本研史料教授 インド古典学

宮崎 泉
Itsumi Miyazaki 「インド文化と仏教」
本研史料教授 仏教学

檜山 智美
Satomi Hiyanu 「敦煌壁画に見られるインドと中国の世界観の習合」
白眉センター特任助教授 仏教美術史学

古松 崇志
Takashi Furumatsuo 「契丹(遼)の王権と信仰」
人文科学研究所教授 東洋史学

上島 享
Susumu Uejima 「日本中世の神と仏」
本研史料教授 日本史学

吉田 豊
Yutaka Yoshida 「日本にある江南マニ教絵画から見えてくること」
本研史料学助教授 日蘭学

Commentator

小倉 智史
Satoshi Ogura 東京外国語大学兼教授
西南アジア史学

2021年 12月4日(土)
オンライン開催 13:00~17:30

事前登録制

視聴するためには事前登録が必要です。左のQRコードまたは下記URLよりお申し込みください。
<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/events/2021symposium/>

京都大学大学院文学研究科
京都大学文学部
京都大学文学研究科連絡先
807 TEL.075-753-2760(内線)・4-808 (FAX)
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/>

のが、宮崎泉「インド文化と仏教」です。仏教文献にもとづき不殺生・慈悲・空性などを検討すると、不殺生・慈悲は仏教の重要な教えであるにも関わらず、その理由や根拠が仏典には明記されていないことを指摘し、これらは黄金律とも称されるインドで当たり前の思想文化に根ざしたものだとして述べられました。

敦煌美術を扱う檜山智美「敦煌壁画に見られる中国とインドの世界観の習合」では、北魏時代の敦煌においては仏教・儒教・道教が混淆し、その様子が美術

作品にも反映しており、壁画の図像には見る者によって受け取る意味が異なるダブルイメージの技法が用いられ、信仰を異にする人々を取り込んだとします。そして、仏教的な須弥山と中国的な崑崙山、龍の造形表現などから、ダブルイメージの技法を具体的に説明されました。

古松崇志「契丹(遼)の王権と信仰—ユーラシア東方遊牧王朝の基層信仰と仏教—」では、10~12世紀に中国北方を支配した契丹(遼)の即位儀礼・天地祭祀・葬送儀礼などを取りあげ、契丹王権における基層信仰と仏教の機能について考察をしました。即位儀礼や天地祭祀は中央ユーラシア狩猟遊牧民に共通するシャマニズムに根ざした儀礼で、そこには仏教的要素は見られないのに対して、葬送儀礼には遊牧民の基層信仰の強固な基盤の上に仏教が重層的に受容されており、両者が混淆することではなく、それが日本との差異だと指摘されました。

上島享「日本中世の神仏習合」では、10世紀中葉以降、古代とは異なる新たな神仏習合が進展することを、神社境内における仏塔や神宮寺の建立、諸国の国鎮守社での法会の実施などから示しました。そして、本地垂迹思想が浸透していき、思想的には日本の神々は仏界に取り込まれるものの、神々は仏菩薩が果たすことのできない人々と密着した存在として、

独自の役割を持つことになったと述べました。

マニ教絵画を検討した吉田豊「日本に存在する江南マニ教絵画の研究から—セグメンタは何を表すのか?—」では、マニ教が中国へ伝播することで「融合」ではなく「迎合」が起こり、マニ教の中国化が進むと指摘しました。そして、マニ教絵画においてセグメンタを付けているのはマニであり、王の改宗の姿を示すという従来の説を否定されました。

これらの報告を踏まえて、全体的なコメントを述べた小倉智史「諸宗教の伝播と融合」のとらえ方」では、南アジアの例をあげ、多層的な伝播の過程を指摘した上で、諸宗教の融合に関しては、「純粹」対「融合」という二項対立的理解の問題点や、外部からの観察と当事者の信仰との差異を考慮すべきことなどを述べられました。

各報告の具体例の紹介や小倉コメントをうけて、全体討論ではユーラシアにおける宗教遺産研究の可能性をめぐって総合的な討論を行いました。各地域・時代の個性を踏まえて、いかに概念化していくのかなど、今後の課題が明確になりました。

なお、後日、シンポジウムの成果と課題に関して、高橋早紀子、赤松明彦両氏からご意見を伺い、ユーラシア宗教遺産部門の今後の研究の方向性についても議論をしました。

シンポジウム「大正二年度朝鮮古蹟調査を探る」

比較文化遺産学創成部門主催によるシンポジウム「大正二年度朝鮮古蹟調査を探る」を、2022年3月25日にzoomを用いるオンライン形式で開催しました。本シンポジウムは、人文科学研究所と共同で日本学術振興会から受託した『課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業』(グローバル展開プログラム)「逸失の危機にある文化遺産情報の保全・復元・活用に関する日・欧・アジア国際共同事業

(JPJS0011120323)」により進めている、京都大学所蔵の朝鮮古蹟調査事業関係資料のデジタル化事業の成果の一端を紹介するために企画されました。

今回のシンポジウムは、日本と大韓民国の複数の機関に分かれて所蔵されている大正二(1913)年度朝鮮古蹟調査報告関連資料の調査・整理状況を確認し、今後それらをどのように統合・公開していくべきかについて議論することを目的としました。

大正二年度朝鮮古蹟調査を探る

大正二（1913）年9月から12月にかけておこなわれた朝鮮古蹟調査の成果は、その後の楽浪郡や高句麗研究に大きな影響をあたえました。しかし、その正式報告書は刊行されず、関連資料は日本と大韓民国の複数の機関に分かれて所蔵されています。本シンポジウムでは、東京大学と京都大学での所蔵資料の調査成果を報告し、今後、どのようにして資料を整理・公開していくべきかについて議論します。

2022年3月25日（金） 13時30分～16時30分



オンライン開催（zoomを使用）

参加無料（先着100名）

参加希望者はGoogleフォームにお名前とメールアドレスを記入してご送信ください。
参加申込締切 2022年3月22日（火）
<https://forms.gle/Gv1vSABA8wvxh69z9>

プログラム

趣旨説明 吉井 秀夫

（文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター長）

報告

「関野コレクションからみた大正二年度朝鮮古蹟調査」
早乙女 雅博（東京大学名誉教授）

「写真からみた大正二年度朝鮮古蹟調査」

吉井 秀夫

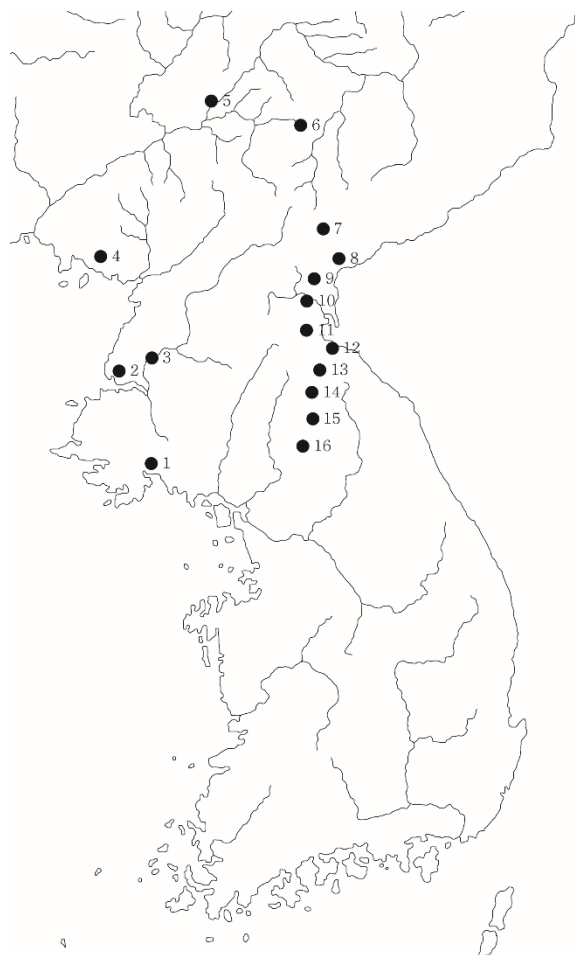
討論

早乙女 雅博・吉井 秀夫

*本シンポジウムは、日本学術振興会の課題設定による先進的人文学・社会科学
研究推進事業（グローバル展開プログラム）「没年の危機にある文化遺産保存の
保全・復元・活用に関する日・韓・アジア国際共同研究(JPJS0011120323)」の卒業成果
の一部です。

お問い合わせ：京都大学文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門 Tel：(075)753-7691

主催：京都大学文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター
比較文化遺産学創成部門



早乙女雅博「関野コレクションからみた大正二年度朝鮮古蹟調査」では、東京大学で所蔵する関野貞コレクションの中で、大正二年度朝鮮古蹟調査に関係する資料の整理・公開状況が、多くの写真を用いて紹介されました。

吉井秀夫「写真からみた大正二年度朝鮮古蹟調査」では、京都大学考古学研究室が所蔵する大正二年度朝鮮古蹟調査時に撮影された写真群（このたび本センターで『京都大学考古学北朝鮮満州輯安縣遺物遺跡写真』として刊行）を、関野貞コレクションにある写真目録や、大韓民国・国立中央博物館収蔵のガラス乾板目録などと比較検討した成果を報告しました（右上は、写真撮影地の分布図）。

討論においては、谷豊信氏（元東京国立博物館）から、大正二年度朝鮮古蹟調査で輯安において採集さ

れた瓦磚類の研究動向について、説明していただきました。また、韓国における朝鮮古蹟調査事業関係資料のデジタル化事業の現状について、李基星氏（韓国伝統文化大学校）から報告をしていただきました。さらに、参加者から、資料を整理・公開していく上で参考となるさまざまな質問・指摘をいただき、それに答えることで議論を深めることができました。

前回のシンポジウム（「慶州・金冠塚がかたりかけるもの」）と同様、今回も大韓民国などから多くの研究者が参加してくださいました。コロナ禍がおさまると、同様のテーマについて、韓国の研究者を交えた国際シンポジウムが開催できる日が訪れることを望んでいます。

センター開催行事日誌(2022年1月～3月)

■2022年1月14日(金)(人文知連携拠点)

人文知連携共同研究会 第11回東アジア「間文化」研究会を開催しました。

■2022年1月～(京大文化遺産調査活用部門)

医学部構内・吉田橋町遺跡の発掘調査をおこなっています。

■2022年2月17日(木)・2月21日(月)

(人文知連携拠点)

KUDH Basics: 文献管理ソフトウェア・ワークショップを開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/events/kudh-basics-referencemanagement/>

■2022年3月16日(水)～5月15日(日)

(京大文化遺産調査活用部門)

京都大学総合博物館にて、「2021年度特別展 文化財発掘Ⅷ 埋もれた古道を探る」を開催しています。

<https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/arcKU/topix38.html>

■2022年3月23日(水)(人文知連携拠点)

人文知連携共同研究会 第12回東アジア「間文化」研究会を開催しました。

■2022年3月25日(金)～5月25日(金)

(京大文化遺産調査活用部門)

京都府立図書館で開催されている総合博物館特別展との連携展示が開催されています。当部門から白川道より出土した土器・陶磁器および幕末に設置された尾張藩邸より出土した土器・陶磁器を出展しています。

<https://www.library.pref.kyoto.jp/?exhibition=63630>

■2022年3月26・27日(土・日)

(内陸アジア学推進部門)

第20回中央アジア古文書研究セミナーを開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/hanedahall/hkk-nextmeeting/>

■2022年3月29日(火)・3月30日(水)

(人文知連携拠点)

KUDH Basics: 人文学資料デジタル化の基礎知識・TEIワークショップを開催しました。

■2022年3月29日(火)(内陸アジア推進部門)

2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」を開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/hkk-nextmeeting3/>

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

URL: http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/

